

小谷城址の研究(3)

丸山竜平・深貝佳世*

A Study of the Ruins of Odani-jo (3)

Ryuhei MARUYAMA and Kayo FUKAGAI

はじめに

小谷城址の中でも、佐々木六角氏が北伐するなかで当初に築かれたとされる金吾丸、また信長と対峙してからやはり小谷城内に築かれた山崎丸や福寿丸、あるいは出城としての丁野山城や中島城、さらには支城である国境の城・野瀬山城(長比城)など、いずれも浅井氏の命運に関わる最重要な山城であった。にもかかわらず、これまたいずれもが越前の朝倉氏によって築城されたと見なされている。(註1)

しかし、越前の朝倉氏関連の山城を一瞥(註2)しても、遺構において類似するものはほとんど無く、小谷城址や出城、支城の縄張構造の起源はむしろ近江の中にあるのではないかと予想された。特にこれまで分析してきた小谷城址そのものについてもその感は免れない(註3)。

近江において小谷城の築城技術を探っていくに際して、具体的には、a) 半地下式穴蔵様遺構、b) 尾根筋を分断して遮蔽機能を発揮する堀切や堀切・堅堀、あるいは切岸に面した横位帯郭構造の存在、また、c) 特殊な構造を思わせる大規模な門構やd) 類似の凹凸門様遺構、さらにはe) 随所に見受けられる石垣の多様な構築、が重要な決め手になるにちがいない。

果たして小谷城址築城に際して、その技術においても、山城の系譜においても、いかなるものがどこから導入、摂取されたのであろうか。このことの解明は近江山城の研究はもとより小谷城址そのものの研究に際しても免れることのできない課題である。

第1章 小谷城址以前の梯郭式山城

近江国において小谷城址築城以前の山城にはどのようなものが、またどのような地域に存在するのであろうか。そのことを明らかにすることによって小谷城址の系譜を探ることが出来るに違いない。しかし、そのような作業を行う前に、小谷城址以前の山城の何であるかを明らかにしなければなるまい。以下の考察とも関連するのでこれまで説き及んできた点に関してのみ箇条書きにしておきたい。

つまり小谷城址築造の契機となった磯野山城の構造から見た、先行する山城の特徴は、a, 郭には今だ、土塁の使用が認められないこと。ただし、14、15世紀に今だ土塁が出現しておらなかったというわけではなく、近江の城構の中にそのような防御施設がいまだ採用されておら

*愛知学院大学大学院生

なかったにすぎず、寺院、平地の館などでは古代から存在する。

そして、やはり小谷城址に先行するかとみられる岡山城址では、b, 地山を削り残した形式を採る低土塁の存在(地山削り残形式低土塁)が認められること。ただし、それは郭を完全に囲画、防御するような本格的なものではないこと。c, 山を削り残しての大規模な土塁が存在すること。平地の、特に寺院で用いられてきた土塁作りの外観を思わせるが、郭を完全に囲堯するものではなく、一条のみしか認められないこと(寺院構形式高土塁)。

また、小谷城址の中で用いられている施設の中で、築城当初もしくは早期段階かと思われる遺構から判断して、小谷城址築城以前にすでにどこかで用いられていたと想定し得る構として、d, 尾根の地山を削り残しての低くて天場や幅が一定しておらない土塁遺構、もしくは土塁状遺構。e, 平地の寺院構え・寺構の土塁を真似たとしか思えない大規模な土塁遺構。

ただし、d, eはいずれも郭を囲堯しておらず、一方に設けられる程度か、軽く囲画する程度のものである。

これらの点からみて、どうやら土塁の有無やその形式は、山城の相対的年代を決定する大きな要素である。では一体、さきのa, b・d, c, eの要件を備えた山城は近江のどこに所在するのか、またそれはどのようなものか、この点から述べてみよう。ただし、この問題は後述するように土塁が早くには古代から防御的あるいは施設の荘厳化、囲画、遮蔽機能として用いられており、そのような中での山城に限っての採用、模倣であるので一筋に説き明かせるものではない。がさきに進んでみたい。以下近江の最古期の山城を一瞥することから始める。

高島郡今津町伊井城

現在滋賀県下で想定される最古の山城である。箱館山の北東尾根続きの先端に程近い、東南に張り出した山稜頂部先端にあって、標高489m前後、比高360mの高所に位置する。前面、左右に険しい切岸を設け、背後には一条の堀切・堅堀と同じく一条の堅堀、都合二条からなる防御ラインを構える。郭は尾根筋斜面を断面L字に切り盛りした、5段の削平地からなる典型的な梯郭式である。しかし、この各郭には土塁や横堀などの防御設備はない。背後の堅堀や堀切がなければ山城の認定は不可能であり、山岳寺院などの別個の遺跡を想定しなければならないといった状況のものである。その規模は堀切から先端まで東西80m、南北幅およそ25mである。最上段の郭は18×13mの長方形を呈し、2段目から4段目にかけてのそれは、それぞれ7×18.5m、4.5×17m、7.5×22m、15×14mであった。

第1段の郭の背後、切り岸・法面の上に低い土塁様のものが伺えるが、低くて小さくけして土塁と呼び得るものではない。しかし、子細に見るとこの様なものが観察される。

山城の縄張り構造からすると、郭の配置形式が極めて直列的かつ単純な形態をとり、かつ通路も郭の辺縁部を直線的にたどることができる。いわば虎口といった防御施設の工夫が認められない。それに加えて横堀は勿論、土塁さえも今だ採用していないことは、この山城が16世紀中葉にまで下らないことを示している。このような点からして、この山城は、あるいは『朽木文書』等(註4)に伺える「長享元年(1487)に將軍足利義尚が六角高頼によって横奪された近江国内の寺社公家領を回復するために、大軍をもって近江遠征をおこなったが、その折りに幕府の出陣の準備を聞いた六角側が、北国街道を封鎖するために高島郡川上荘に城郭を築いた」とするものではないかと予測し得る。もとより文献にみえる河上荘の城郭がどれか、所在を明記しておらないので不明といわざるをえないが、伊井城の所在地もかつての河上荘内であったことからみてこの可能性は高い。つまり、縄張り構造からいっても15世紀の後半にこの山城を位置付けることに何等違和感はない。

坂田郡米原町磯山城

米原町磯の磯山城は、南と北に松原と磯の両内湖が発達し、その間に半島状に突き出した格好で琵琶湖に面する巨大な独立丘陵に築造されている。坂田郡の最南端となり、山裾から南は彦根市に属する。湖上交通は、湖南から北上し、天野川・息長川の河口である朝妻・世継の港に至るが、その眼前に立ちはだかり、交通を扼する好所である。

その特徴は何と言っても、a) 巨大なことで、Y字形の尾根筋のうち、琵琶湖に面する部分は400mにわたって長大な3つの郭が連続し、磯の内湖に突き出す他方の尾根筋にも郭がおおよそ300mほど続く。また内陸部に向かっての丘陵上にも断続的に加工地が観察され、南端の尾根筋のピークを中心にしておおよそ100m前後にわたって郭が6か所前後構築されている。その総構の全長は1kmに及ぶことになる。明確な城郭の部分だけでも総延長800mに達する。b) 典型的な梯郭式である。ただ、尾根筋が細く、傾斜が緩やかな箇所があるので、長細い郭が主流を占めたことが見て取れる。さらに注目すべきことは、これだけ長い尾根に、連続的に郭が認められるものの、その間に堀切、堀切・堅堀がまったく認められず、かつ山城の要件にもなる郭の最先端あるいは最後尾となる丘陵の前後に、c) 堀切、堅堀などの防御施設が一切認められないことである。しかし、中心的な郭の前面や左右には明らかに、d) 切岸が認められるし、郭の前面に小規模な、もしくは細長いいわゆる、e) 帯郭が所々に散見される。つまりこの山城は、f) 土塁も横堀も備えず、かつ切岸と帯郭、小郭以外一切の防御施設を持たない郭群からのみなるものであることに注意されるのである。c) に関する所見でいえば、文献との照合から明らかに最古に認定し得る今津伊井城を遡る山城の可能性は大である。

ただ、先に今津の伊井城において、堀切・堅堀がなければ山城との確証が得られなかったのではないかと述べたところであるが、たしかに、郭のみでは、ただの削平地、あるいは平坦地に過ぎないのであって、切岸とて、下の平坦地の面積の確保のために山麓を大きく切り込むことによっても生じる現象であって、人工の平坦地即山城の確証足り得るものではない。小郭、帯郭とて、急峻な斜面に平地を要求した場合に、小さく、あるいは長細い平坦地しか築成できないといった地形の制約の問題に帰せられることは十分ある。

このためには、決定的要件ではないにしても、一応、この磯山に大規模な寺院、もしくは神社がかつて存在していたかどうかの検討をまず必要とするであろう。しかし、そのような伝承も文献も、また遺跡におけるそのような痕跡も欠くのが実情である。たとえば、寺院、神社においては、各平坦地を経て、本堂、あるいは拝殿へ通じる参道の発達、あるいはその廃道が必ず尾根筋に沿って認められるが、そのような郭と郭を結ぶ道さえも明確なものが迎れないのがこの磯山である。このような各平坦地・郭への取り付け道の存在は山城遺構と神社跡・寺院跡との決定的な相違である。

磯山城は、土塁や初期の土塁あるいは土塁への徴候ともいふべき不要な土砂の僅かな盛土も見出だせないばかりか、堀切も無い。あるのは切岸と防御用の帯郭、小郭だけであった。このことからいって、あるいはさきの伊井城に先行する山城ではなかったかと思慮されるのである。この点がさきの伊井城のように文献面で傍証出来ないであろうか。

この山城に関連してのつぎのような文献が知れる。つまり、『大原観音寺文書』(446, 3-2) (註5)「浅井備前守亮政下知状」において、

大原庄観音寺門前あるき両人事、申付候間、普請させらるましく候、恐々謹言

備前守

(大永頃カ)

亮政 (花押)

八月廿九日

磯山普請

御奉行 衆中

とあり、浅井亮政の時代にすでに浅井方の城として機能していたことがわかる。(註6)

それのみか、また『彦根古絵図』(註7)『当御城下近辺絵図附札写全』(註8)『近江彦根古代地名記全』(註9)には、松原弥惣右衛門の城として、六角方の城であったが、永正年間に京極家の手によって落城したことが記されているのである。

つまり、上記3文献がどれほど信憑性を持つかどうか定かではないとはいえ、永正年間(1504～1521年)にこの山城がすでに存在していた可能性は大いにあるのであって、しかも遺構の縄張りからいっても齟齬しないという結果が得られる。このことは次に述べる磯野山城の遺構の特徴からしても矛盾はない。むしろ、先に述べた今津の伊井城よりも遡る可能性が高く、さすれば伊井城が長享元年(1487)と想定されたわけであるからそれ以前の築城であった可能性が出てきたとみてよかろう。

伊香郡高月町磯野山城

すでに「小谷城址の研究(1)」(註10)のなかで、詳述した山城である。小谷城の築造の契機となった山城ではないかと想定したものである。磯野氏が永永年間に築いた梯郭式山城であって、標高271m、比高差169mを測る、高所に築かれたものである。その特質は土塁や横堀がいまだ構築されておらず、ただ執拗なまでの堀切・堅堀が尾根筋の前面と背面に設けられている典型的な初期の山城であった。しかし、子細にみると背後の最初の堀切の肩口に排土を盛り上げた、小規模な土塁状のものがあることに注意される。土塁の知識はあったが、本格的に取り入れなかったものとみたい。山城の規模は全長210mでピークに主郭を設け、前面に4郭、背後に5郭を配するものであった。主郭の規模はおよそ16.5×8.2～9.9mで、第2郭6.2×13.9m、第3郭16×8.5mであった。(註11)

さきの推定からいえば、その創建時期はわずかに対岸の小谷城とは先行することになるが、その時間差は大きくはない。しかし、小谷城が後続するものであることは揺るがせないことになる。現在の両城の所見でも、相前後するものであることに相違ない。

近江八幡市岡山城

当城についても、さきに「小谷城址の研究(1)」において、小谷城址および磯野山城址の築造年代を検討するために例示したものである。やはり、a) 梯郭式山城であり、標高187.7m、比高差101mを測る高所に位置し、その眺望は湖東や湖南、湖西を一望できるものであった。その山城としての特質は、b) 巨大な堅堀や横堀を備えているものの、堅堀は堀切と連動するものではなく、防御上のような機能を持つのか不明確なものである。あるいは主郭へ取り付く登城路の機能を合わせもったものかとも思える。また、c) 横堀も山腹に、しかも部分的に設けられたもので、異様な規模の大きさであるとともに、防御上での役割に関して理解し難いものであった。同じ事は山頂部に近い第2郭の、それも北側にのみ、d) 大規模な土塁が一条認められたが、山の旧斜面を削り残して土塁としたもので、この山城には不釣合なものであった。いわばこの山城には通常では理解できない遺構が各所に認められ、山城構築に関して、城構以外の要素が取り込まれたのではないかと予測し得た。

なお、中心主郭には削り残しと見て取れる土塁状高まりが観察される。その郭の規模は62×10mで、第2郭35×10m、第3郭45×9～12mであった。そこには郭を囲画するような明確な土塁はなく、一部に認められるものも土盛からなるものではなく、地山を削り出して設けるも

のであった。このような山城の特徴は、この城の文献でうかがえる時期と符号するものであるとあってよからう。つまりこの山城は、九里信隆が1508年に築いた山城であったとする文献と矛盾するものではない。(註12)

坂田郡米原町鎌刃城

鎌刃城址もまた、梯郭式山城で、かつ小谷城址以前に遡るのではないかと見なし得るものである(註13)。先に述べた琵琶湖に面する磯山城の背後、およそ6kmの山中高所に営まれたものである。琵琶湖の湖上交通路に面するものではなく、かわりに、日本の幹線道路である、a) 中山道・東山道に面して築造されたもので、街道のある谷筋からおよそ1.5kmほど背後の尾根筋上に構築されている。標高384m、比高差255mの、b) 高所にあつて、眼下に湖北の平野部や琵琶湖、さらには湖東の平野部が望める好所に位置している。山城の郭群は全長380mを測り、前後の堀切間の距離でおよそ300mである。県内の梯郭式山城のなかでも、典型的な城構をとるものでいえば、小谷城に次ぐ、県下でも、c) 屈指の規模を持つものと言って過言ではない。郭はおよそ20箇所からなり、その規模は、主郭のそれは北辺27×東辺26mを測り、また前面の第2郭が9×9m、第3郭が7×14m、第4郭が8×44mであった。また背面の第5郭は8×10m、第6郭は8×15mを測るものであった。

さらにこの山城の特質は、さきのa, b, cの三点に加えて、d) 石垣を要所で築いており、中心主郭部の急峻な法面での構築や、第5郭の南斜面での砂防用石垣としても構築が認められた。また、その他の特質として、e) 城内に尾根筋道が温存、遺存していることが指摘できる。さらに、f) 背後の堀切のさらに後方の清竜滝に「水の手」が遺存し、城内へ取水した石樋の存在が認められることである。さらに細部の縄張りに関してまでこの山城の特質を述べれば、g) 穴倉様半地下式遺構の典型ともいふべき堅穴状地下式遺構・堅穴状郭が第3郭として、最前面に認められる。また、h) 前面横位帯郭切岸二段構えとして名称付けした特殊な構造物・縄張りが認められることである。さらに、i) 巨大な門遺構の存在である。中心主郭部である第1郭および前面の郭である第4郭に大手門として存在するもので、あるいは櫓門の原形を想定しうるのでないかと考える。

さらにこの章とかかわる事柄として、j) 土塁が認められるものの、土盛による構築が皆無なことである。つまり前面横位帯郭に、その前面肩口に設けられた土塁は紛れもなく削り出したもので、土盛りによるものではない。背後の第6郭の背面に認められる土塁も、いずれも削土、切岸からなるものであった。それらは、中心主郭が典型的に示すように、丘陵尾根筋をカッティングし、平地を確保する際に、故意に一部斜面を削平せず、削り残して土塁形状としたものである。このため土塁の天場は同一レベルではなく、尾根筋の部分は土塁の背丈が高く、その幅も広い。また、尾根筋から離れるに従い土塁はその背丈を低くし、幅も狭くなるといった、旧地形に左右されたその間の事情をよく物語っていると見える。勿論、k) 横堀はまったく存在しない。

鎌刃城の特徴は以上の様であるが、様々な特質を備え、どの点を取り上げても本格的な次期山城の面影に繋がる縄張りといえるのではなからうか。それでも土塁に関する限り、相対的には磯野山城に後続する時期を比定できよう。しかし、それはあくまでも相対的な年代であつて絶対年代ではない。

以上のように県下の古式の城郭を一瞥してきたが、大永年間前後に、最古の土塁、つまり盛土からなるものではなく、地山を削り込む、あるいは削り残しておくだけで、そのまま手を加えること無く形成したものの年代の一端が示されたといえる。しかし、厳密には、その出現の

上限を示すものではなく、あくまでも本格的な土盛土塁が出現してくる上限がこの辺りにあったことを物語るに過ぎない。

この意味で、磯山城はより一層年代が遡る可能性がある。つまり磯山城—伊井城—磯野山城・岡山城—鎌刃城・小谷城といった関係が見て取れる。もちろん系譜的にこのような時間的経過が認められるといったことではなく、相対的に前後関係が示唆されるのである。すこし解説を加えるならば、磯山城は堀切など一切の防御施設が認められないこと、伊井城では背後にのみ堀切、堀切・堅堀が出現し、郭の外縁に僅かに低土塁があること。さらに磯野山城では前後に堀切・堅堀が出現し、土塁は伊井城で観察された実を取るに足らない低土塁と類似のものが認められたことである。ところが、この磯野山城、鎌刃城、岡山城、小谷城のうち、およそ年代の判る磯野山城、岡山城、小谷城に関してはそれらがほぼ相前後するもので大きく見て同時期であることが判明する。にもかかわらず、それぞれの山城がかなり変化に富んだものとなっていることが判明する。

その主因は、磯野山城が前面、背後に多状の堀切・堅堀を設けて防御に徹したにもかかわらず、岡山城や小谷城にはその堀切・堅堀が全くといっていいほど採用されておらないことである。また、それに反して、磯野山城が低土塁の痕跡を見せたに対して、岡山では大規模な削り出し土塁の構築を示し、同じく小谷城でも同様なものが構築されていたことである。つまり3城の持つ城の特徴がすっきりした形で対比し難いことにある。岡山城の山麓に近い山腹の横堀に関しても同様のことが指摘し得る。小谷城の石垣についても同じである。つまりこのことは、さきの3城が、形式的に順序よく相前後して構築されたのではなく、それぞれが別個の系譜をもっていたことを示唆するものである。さもなくばそれほど多様で異質な要素は生まれなかったであろう。

では、このような系譜が辿れない多様な山城の築造はどのようにみればよいのであろうか。つまり、山城の防御施設に採用された諸遺構がそれぞれの城構築までにどのように準備され発達してきたのか、といった事柄を踏まえる必要が痛感される。このためここでは若干の参考のために山岳の寺院遺構について取り上げておきたい。実際は山岳遺構に限らずむしろ平地での寺院遺構における石垣や土塁の構え、あるいは集落遺構の堀や土塁の構造なども不可欠であるが、ここでは山城の占地を考慮しながら述べるため話題の多くを山岳遺跡においてみた。

- 註1. 『滋賀県中世城郭分布調査 7』(滋賀県教育委員会, 平成2年3月)
 註2. 『福井県中世城跡分布調査報告』(福井県教育委員会, 平成元年3月)
 註3. 丸山竜平, 深貝佳世, 齋藤めぐみ「小谷城址の研究(2)」(『名古屋女子大学紀要 第42号』平成8年3月)の末尾でもこの点に触れた。
 註4. 『滋賀県中世城郭分布調査 8』(滋賀県教育委員会, 1991年3月)
 註5. 『大原観音寺文書』(446, 3-2)(滋賀県教育委員会, 昭和50年3月)
 註6. 『滋賀県中世城郭分布調査 6』(滋賀県教育委員会, 1989年3月)
 註7. 『彦根古絵図』彦根市立図書館蔵。
 註8. 『当御城下近辺絵図附札写全』彦根市立図書館蔵。
 註9. 『近江彦根古代地名記全』彦根市立図書館蔵。
 註10. 丸山竜平, 深貝佳世「小谷城址の研究(1)」(『名古屋女子大学紀要 第41号』平成7年3月)
 註11. 註1に同じ。
 註12. 『滋賀県中世城郭分布調査 4』(滋賀県教育委員会, 1986年3月)
 註13. 「近江国坂田郡天野川流域における境目の城と鎌刃城の歴史的位置(1)ーその考古学的検討ー」

『紀要』第31号（東海学園短期大学 1996年9月）

第2章 城郭遺構と梯郭式山岳寺院

城郭遺構として認められる防御施設がどこから、どのようにして採用、導入、模倣されたのか、特に遺構が山尾根に築かれることから山岳遺跡わけても仏教遺跡・寺院に絞ってその様子を探っておきたい。

県内の山岳寺院には、古代から著しいものがあり、特に比叡山、比良山、己高山、伊吹山、霊仙山、あるいは金勝山、田上山、醍醐山など高山の要所に営まれてきた。その立地も、山頂そのものに構築されたものや山頂に近い山腹あるいは山腹の尾根上に占地するもの。さらには山麓でも山腹に相当する尾根状高まりとなった峰状の頂部、あるいは山ひだに潜むように立地するものなど実に多様である。

山腹から下降する尾根筋を削平しての梯郭式寺院など、滋賀県では遅くとも奈良時代には築成されていたとみてよからう。たとえば栗太郡栗東町狛坂廃寺跡とその磨崖仏がよく物語るところである。

また、比良山中の長法寺跡では、本堂に取り付く参道とこれに面した坊跡群の間には石積みからなる石塁が続く、実に壮観なものである。しかも、石積みはその角が算木積みの祖形を示し、これまでは安易に江戸時代ではないかと見なしてきた立派な構築物である。しかもその積み上げられた石材には極希に石材を割りとする時に用いた「矢」のあとさえ伺える。

この長法寺跡は地元の伝承では、近江の各地域でのそれと相違なく、信長によって焼き討ちされ廃亡したものと信じられてきた。しかしその真相はどうであったろうか。この廃寺の歴史を明らかにすることによって、現地に伺える豊かな遺構の年代の一端が想定できるのである。幸いにして、この長法寺跡についてはその興亡に関する記録と先行研究がある。

『高島郡誌』（註1）によると、

「長宝寺・山門三千坊の一院なりきという。文明三年十一月の売券に長法寺大品坊の名あり。往古は大伽藍にて所領も多くありしが、織田氏の為に焼かれて廃寺と云う。・・織田以前に廃したるか。今も伽藍の址、鐘樓の址、経塚など尽く残れり。古石碑も存すれど文字見えず」とあって、その頽廢については、伝承に囚われず、信長以前か以後かについて疑問を提示しているのである。

この問題に取り組んだ松本義懿氏は、長法寺とその遺構について、「古記録の探訪」を試みた（註2）。その結果、創建については、比叡山護国縁起の嘉祥二年、西暦849年を疑うことはできなとし、その消長については、かつて元久二年（1205）にこの長法寺へ施入せられた大般若経が、文保元年（1317）からその修理が始められたことがその奥書から判明するとともに、さらにこの奥書からこの大般若経が応永十年（1403）四月十四日に田中郷の積善寺へ売り出されたことが判明した。それのみか、大般若経を転読するにさいして掲げる十六善神を収めた箱の裏には「大般若経本尊篋 万勝寺 文明二年庚寅二月日作之」と墨書されていた。つまり、この大般若経は、田中の積善寺からいったん万勝寺へ移って、のち現在の中牧大宮神社に入ったものであった。文明二年は1470年であり、また先の売券は文明三年であったから1471年であったことになる。このように見るならば長法寺が信長の元龜天正期ごろまで法燈を守ることなど不可能であったことを示している。ここでの重要な事柄は、この長法寺址が少なくとも1403年以後に、現地に認められるような石垣積の普請など不可能ではなかったかということである。

ましてや、文明年間にまで下るとなおさらのことといわねばなるまい。つまり石垣はたといその技法に近世に顕著な算木積みの徴候や矢の跡があろうとも、その構築は15世紀もしくは14世紀のものであったことになる。

このような所見は、同じ比良の山中のダング坊遺跡にあってもその山門左右の石垣に同様なものがあってやはり時代を引き下げる根拠がないのである。ここでは山小屋裏の坊跡群中に低い土塁が観察されるが、けっして削り出した山城の古式のそれではない。土を掻き集めた程度のものであるにはあるが、同様な目で比良山中の山岳寺院を一瞥すると、比良山系では最北端を占める岳山頂上には、二基の石窟があって入定窟かと思われるものである。その石積からして近世におよぶものではない。石材には矢の跡は無く、また隅の積み方も近世の算木積みほど整然としたものではないからである。問題はこの石窟のある狭い山頂の東側に18m四方の平坦地があって、坊跡を想定させるが、堀切などなく山城とは決め難い。ところがこの平坦部の北側は山頂部の削平時に削り残した山地の傾斜部をもって土塁としているのである。

このため土塁の高さは一定せず、山頂側は高くて山の端へ向かって下降していた。高さは1～3mにおよびその幅も広いものである。まさしく岡山城の小型版である。同様なことは同じ比良山中の寺院遺構で幾つか指摘できる。しかし、後世に山城に転用された可能性の認め得るものもあり、かつ年代の決め手に欠けることが悔やまれる。その点で山城に程遠く、かつ土塁の初源を暗示する比叡山の遺構に説き及んでおく必要がある。(註3)

比叡山は比叡三千坊と人口に膾炙されたごとく、峰峰に寺坊が満ちているとって過言ではない。しかし、そのなかで三塔と呼ばれる主要伽藍地については極めて特徴的な占地形態を採っている。山城遺構、城の構えを考察するにさして重要な視点を提示するので触れておきたい。なお、特にこの点に関しては城郭研究家長谷川銀蔵氏に、直に現地において教示いただいたところである。

たとえば、根本中堂の位置する東塔では、北から南へ延びるように這い上がってきた谷筋が尾根筋の峰近くで小さな谷を作るが、この谷を大きく切り開き、それも山腹をかきとるようにして平坦部を作るものであって、いわばコの字型に三方が峰筋に囲まれた、北に開口する土塁囲みの様な占地となるのである。平坦部の幅は東西65m、南北75mであり、深さはおよそ15mである。一見大規模な土塁に囲堯されたように思える。西塔においてもまったく同様であって、釈迦堂の位置はまさしくそのような占地の中心部に位置することになる。しかも西塔ではさらに相輪堂に近いその南東部にも小規模ながら同様な、南が開けた三方が囲いとなる土塁状遺構が見受けられる。その規模は幅が東西で30m、南北が29mであった。

また、横川では谷筋の削平が不十分であって横川中堂の占地はその典型とはいえない。しかし、近接する恵心堂の占地は、東塔さらには西塔を小型化したそのものといえてよい。その規模は東西南北が44×25mであった。

つまり、山中にあっても、多くが尾根筋や山丘を利用してのものであるが、まがいもなくそこには土塁の景観であって、単に自然地形を最大限に利用しているに過ぎないとはいえ、そこには土塁の何たるかを知ってのことであったといえる。つまり、都など平地部での寺院遺構などにうかがえる土塁の存在を知っての尾根筋の構築に発展していたことを思わせる。しかし、かといって、このような山ひだに潜む占地が都から伝えられたものとみるわけではない。三塔の占地の起源と都の土塁の起源とは別個のものであったが、平安時代に至っては二つの知識が複雑に作用していたとみたい。

このように山岳寺院にまで説き及んで、山城の構えを考えるならば、実は寺構えと城構えと

は全く次元を異にしたものであって、両者は厳密に相互の「構え」を排斥することに徹していたとって過言ではない。すなわち城と寺の構え・構造を相互において本格的に採用することなど厳密には戦国時代をとおしても、けっして無かったとみたい。

しかし、築城者や入城者によって、あるいは寺院領主の性格によってそれも幾分かの程度で、それも極めて部分的に両者の微小な要素が取り入れられたにすぎない。おそらく、岡山城の大規模な削り残しによる土塁や、小谷城址の京極丸での立派な土塁などは山城からではなく、平地の館の土塁か、あるいは山岳寺院のそれ、もしくは都のそれを取り入れたものであろう。当時山城の構えとしては存在しなかったものを採用したのであろう。

すなわち、さきの鎌刃城、磯野山城、小谷城、岡山城などの山城について、単純な方法で系統関係を求めることは不可能であることを山岳寺院は示唆しているといつてよかろう。ここで言える事は、最古期、古期の磯山城と伊井城と除外して、また、その始源は別個の問題として、先の四城が同時に存在したか、一点を共有して相前後して築かれたか否かについては、それぞれが別個の系譜やモデルを有していたとすれば、検討は不可能との結論に達する。むしろ類似する、同じ系譜下にある城こそ厳密な検討によってその後先が判明し得ることになる。

註1. 『増補 高島郡志 全』(高島郡教育会, 昭和47年7月)

註2. 滋賀県立高島高等学校歴史研究部『歴史研究—長法寺跡を調査して—』(昭和34年3月)

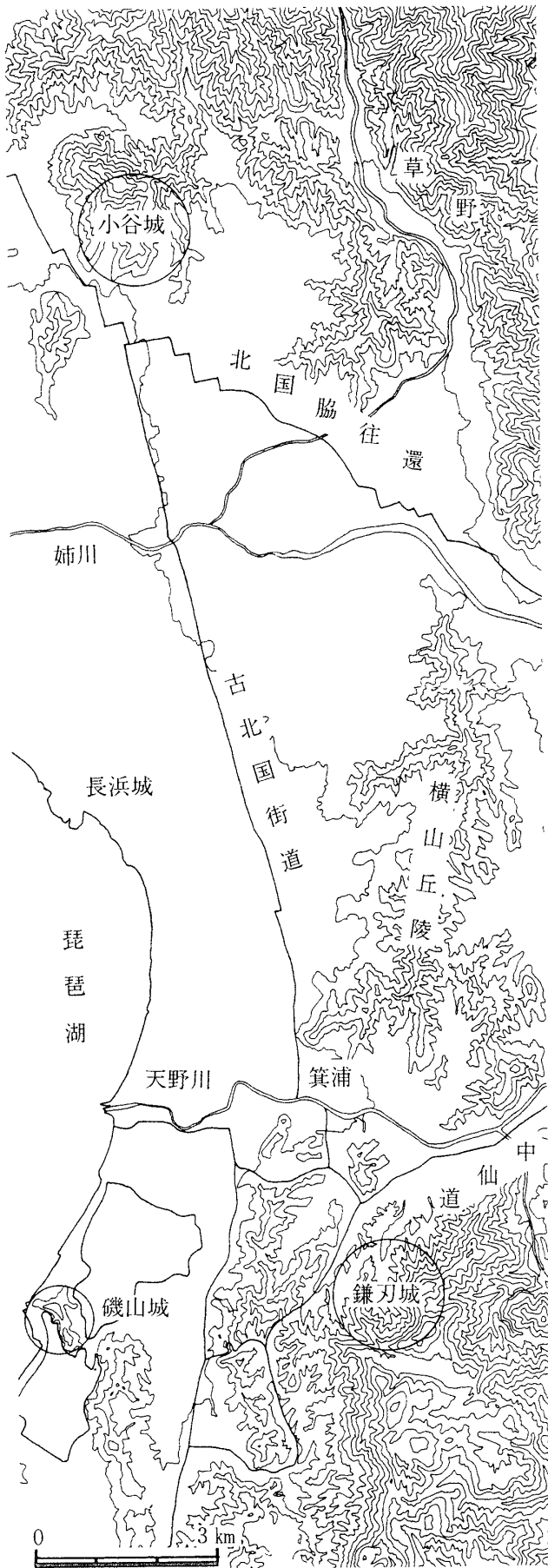
註3. 比叡山の東塔、西塔、横川などの主要伽藍が、三方山に囲まれあたかも土塁に囲画されたかのようになり、占拠することを教示されたのは長谷川銀蔵氏であった。

第3章 小谷城址の特質と鎌刃城との類似

以上のような見通しに立つ限り、さきの四城を軽く比較しただけでも、その背面を執拗なまでの堀切を重ねる磯野山城と鎌刃城、また、鎌刃城と小谷城とでの石垣使用、さらに大規模な土塁の岡山城と小谷城での存在など、それぞれが三巴の関係を醸して問題を複雑とする。となれば、その解決には、山城へ分け入っての、細部に及ぶ全体的な比較検討の中からはしか見通しは得られないことが判明しよう。つまり、小谷城と鎌刃城の間に認められる、また他の城では見られない細部での多くの類似点に関する相互比較の検討を重ねることによって問題の解決が図れるに違いない。

ではその両城の類似点とはどのようなものであろうか、次に列記し問題点を明らかにしておきたい。

a) 小谷城は小谷山(標高398m)と大嶽(標高494m)の二つの山、厳密には一つの山と二つの尾根筋からなるが、その規模は極めて大規模である。総長およそ2.1kmに達する。そしてこの点に関してもまた、鎌刃城は極めて酷似する。すなわち、鎌刃城も尾根筋(標高384m)上の郭群と背後の一際高い雨乞山(標高445m)の山頂部郭からなり、総長は出丸・番場城までを含めておよそ1.7kmに及ぶ。つまり類似の第1点は規模の雄大なことであり、両城が県下の第1位と第2位を争う梯郭式山城であることである。そして第2点目の類似は、b) 小谷城の背後の大嶽の山頂に、尾根筋の郭群を眼下に収める拠点として山城が築造されているが、もちろん鎌刃城もその背後にあたる雨乞山に土塁出現以前に削平されたと考えられる郭が遺存するのである。その規模は前者では50×73mでおおよそ3,650㎡であり、後者では30×3mでおおよそ90㎡を測るものであった。問題はいずれの城も背後の山中から見下ろすことの出来る立地を



取っており、城郭立地としては不適な占地であったことである。にもかかわらずこの地点を選地したのは、他にこの地を優先すべき理由があったわけである。そして、その弱点を補強するために背後の高所を要塞化せざるを得なかったわけである。選地がここでなければならなかった理由が両城にはそれぞれ別の理由で存在したと言わざるをえない。

総長で触れた出丸・番場城についてであるが、c) 両城の前面・最前線となり、かつ丘陵の最先端に出丸が認められることは両城に共通の特徴である。それも相互とも主郭群との間に相当の距離をおいての構築である。しかも、特に中心主郭群との間に嚴重な堀切など両遺構を分かち障害物が築造されておらないことも、丘陵先端部のそれが出丸であったことを物語るとともに、両城の共通性として強調される。郭群と出丸との間は、小谷城の場合、金吾丸との間がおよそ1.3kmあり、鎌刃城の場合には、大堀切から番場城までおよそ1kmを隔てていた。相互ともに主郭群と出丸間があまりにも距離を置いていたために、特に鎌刃城ではこの番場城が出城として一体化した機能を有するものとは考えられてこなかった。しかし、小谷城との類似性のなかで再評価するならば、鎌刃城の総構えの中に位置付けてしかるべきものといえる。なお、この番場城の北側のやはり、鎌刃城の尾根筋の支脈の一つである最先端にも、ほとんどが名神高速道路の法面にかかって消滅しているが、明確な山城遺構の残部が見て取れる。これもまた番場城と対になっての出丸として築かれたものとみてよからう。いずれにしてもこれらb, c 2点から両城の総構えとしての郭の配置に類似するものがあることが指摘できよう。

次にこのb, cに関連してこの山城の特徴を指摘するならば、d) 両城が共に出丸を、主郭群を背後においた同一丘陵の最先端に築き、その眼下、裾部にこの地域を通る主要幹線道路を望むことである。しかも注目すべきことは、坂田郡と東浅井郡とを北から南へとその中央部で横断する、かつては主要幹線道路であったので

はないかと想定される、中山道・東山道から番場で分岐して北陸へ抜ける「古北国街道」の、その南端に鎌刃城の出丸が築かれているわけであり、また、この街道の北の端に小谷城の出丸が設けられた勘定になる（この「古北国街道」と小谷城とのただならぬ関係についてはかつて秋田裕毅氏の教示を得たことがある）。いわば主要道路の南北両端の要所を両城が掌握した格好と、結果的になっているといえる。しかもこの地点は南北道だけではなく、小谷城では美濃国から越前に通じる脇往還道が合流する南北幹線道路にとっても最重要なポイントとなっているし、鎌刃城ではやはり南北の幹線道路が中山道・東山道として美濃国の方向へと曲折して延びるばかりか、湖上から朝妻を経て陸路にて美濃国へ至る東西幹線道路がこの番場の北、つまり鎌刃城の眼下で交差するといった、やはり最重要な要衝であったことが認められる。その意味では小谷城よりも鎌刃城の足下はより重要な交通の要衝であったといっても過言ではない。このような選地は、両城が湖北の主要幹線道路を意識して築城したことの証左であり、ただ、歴史的な経緯からそれぞれ選地が異なる結果になったとみたい。

e) この幹線道路に関連して指摘し得る次の類似点は、その山城の山麓にあたる山下に、城下を形成していたのではないかと考えられることである。つまり、小谷城では小谷山と大嶽山に挟まれた清水谷に家臣の屋敷群を構え、街道に面しては城下町を形成していたことはすでに推測されていることである（註1）が、これに対して、鎌刃城でも、その山麓の谷間、ここではその地形から中山道・東山道に面しての屋敷群の形成となるが、そのような家臣団の屋敷構成が城郭地名と遺物の分布から想定されるのである。特に、明治の地籍図（註2）によると、「殿屋敷」や「堀」などの地名が残り地割りの痕跡から屋敷群の広がりも想定し得た。その規模はおよそ南北300m以上、東西は50m以上におよび、15,000㎡以上であった。

また、岩谷川を挟んでの西側、番場の谷の中央部には現在も中山道・東山道が通るが、この幹線道路を挟んでの東西・左右には城下町が形成されていたのではないかと伺われる痕跡が現在の地割りの中に予想された。このような山上、山下、城下の点にまで両城の構造が類似するのも注目してよいのではなかろうか。以下さらに細部にわたることになるが記述をすすめたい。

f) つぎに注意すべき類似点は、どちらも城内に郭を避けて山腹を這うような格好で山道が認められることである。この山道が小谷城の場合では、六呂坊の鞍部を経て、大嶽背後の山間地域に連携していたのであろうか。ただ、鎌刃城のそれは霊仙山から鈴鹿の山並みへと通じる基幹道路であった可能性が強い。つまり両山道はその重要性において比重が異なり、比較し難いかに思えるが、位置関係など郭との関係を含め縄張りを考えてみるとあまりにも酷似することに気が付く。両者での相違は、小谷城の場合、随所でこの山道を堅堀が分断し、その機能を失っていたか、木橋で補っていたとしても、城郭遺構が優先していたことが判明する。これに対して、鎌刃城ではそのようなことはまったく無く、あくまでも、この山道が山城に優先しており、堅堀もこの山道の分断を回避している。あるいはこの山道を守ることにこの山城の任務があったのではないかと思慮されるほどである。両城での山道をめぐっての経緯が種々異なっていたものの、郭群の築成された尾根筋の左手山腹に山道を配してのプランには相似したものが見て取れるといった指摘に、ここでは止めておきたい。

両城での縄張りにおける遺構の共通性は、次のg) 堅穴様遺構の存在である。小谷城では金吾丸の前面に認められた穴倉様地下式遺構である（註3）。磯野山城や岡山城では認められなかったものである。極めて特徴的なもので、比叡山の山中で白鳥越えに面して浅井・朝倉軍が陣取った山城群に認められたものである。その一連の構築物であるといっているのではない。用途、機能などなお判然としないが、特異なものであるだけに、小谷城と鎌刃城との繋がりを

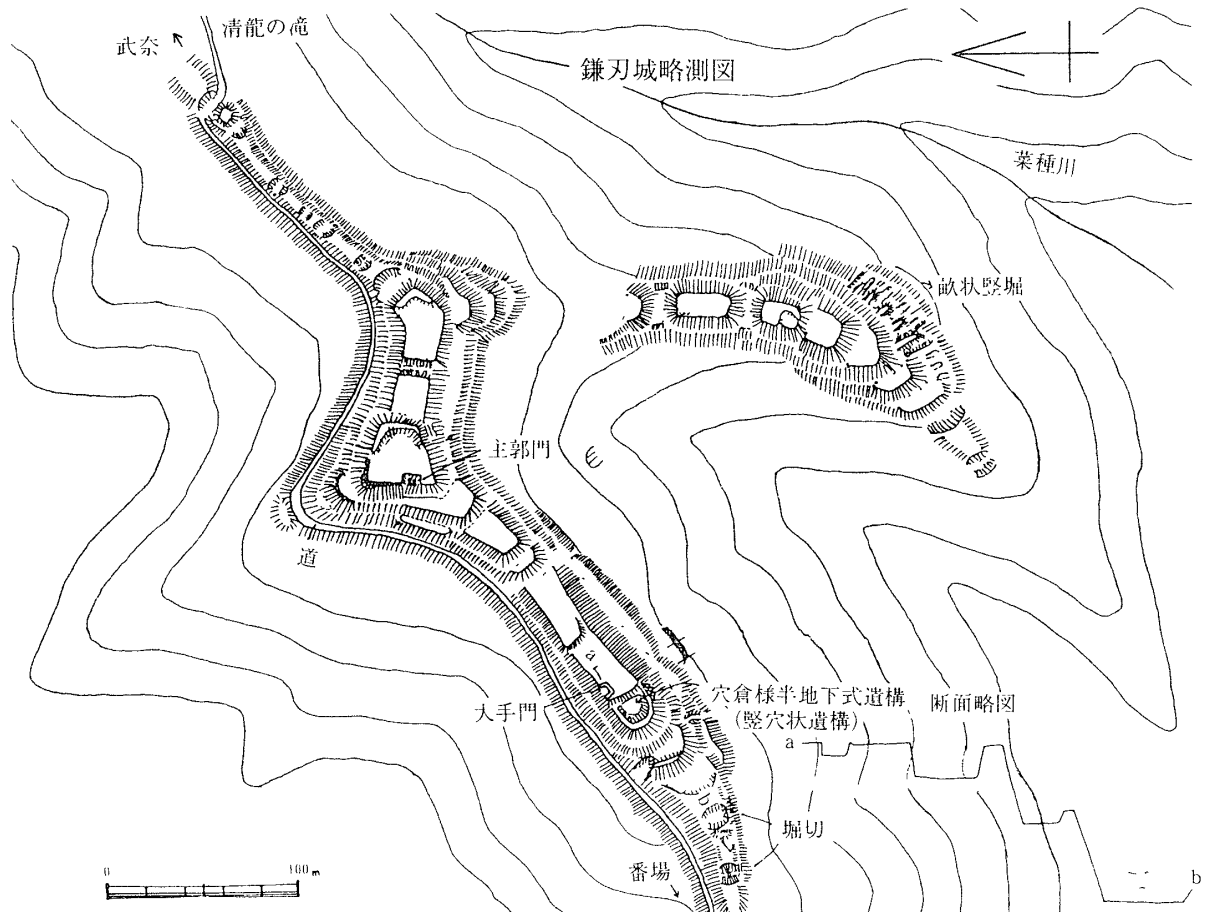
想定し得る有力な鍵の一つである。屋根を被せるか上部に建物を構えるか、いずれにしても現在遺存しているのは下部構造のみである。

同じく縄張り構造に関しては、h) 前面堀切、もしくは前面切岸に認められる、両城に特徴的なやはり防御上の構えである。その縄張り構造は、前面切岸の背後に土塁と横位置の帯郭を配するもので、主郭群を守るための前面の防御ラインとして考案築造されたものである。小谷城では金吾丸の前面や中丸あるいは山王丸の前面に典型的に見て取れる。そして鎌刃城ではやはり前面となる大堀切の背後から第3郭の前面に相当する横位帯郭に典型的に認められる。

このような特徴的な縄張りが他の山城に著しいかと言えば、ほとんど明確なものはなく、両城の共通項目として最優先して取り上げるべきものとする。さきのg) の特徴と共に両城が酷似するメルクマールとなるものである。

つぎに酷似する縄張りの一部としてi) やはり特筆すべきものに巨大な門跡がある。城門としては似つかわしくない大規模なものであるが、小谷城では黒金門と京極丸の門跡がそれぞれあり、鎌刃城では第5郭と中心主郭に認められる城門がそれぞれである。その規模は小谷城の黒金門でその幅5.5mを測り、京極丸で3.3mであった。これに対して鎌刃城の第2郭のそれが幅5.0m、また中心主郭のそれが3.0m前後であった。規模こそ小谷城の方がそれぞれまさるとはいえ大差はない。このような城門が認められる梯郭式山城自体極めて特異なものであって、伊井城はじめ、岡山城や磯野山城、あるいは磯山城でも明確にはされておらない。

ただ、両城での相違は、小谷城のそれが門脇に土塁を伴うものであって、あるいは櫓門として構築されたのではないかと思慮されるに比して、鎌刃城では土塁が伴わないことから建築構造上もしくは時期的な違いが予想される。しかし、それにしても両城ともにこの巨大な城門の



左右に空間が遺存することからみて、櫓構の城門であった可能性は大きいと考える。これもまた、両城の緊密な類似点として指摘できるのである。

1) 最後に石垣の問題に移ろう。すでに記載したように石垣は高島町長法寺跡の事例からその構築年代の一端が予想され、明らかに中世にまで遡ることが想定できた。しかし、かといって梯郭式山城に限れば必ずしもこのような石垣は一般的なことではなく、そのことは中世山岳寺院においても同じである。すべての山岳寺院遺構に石垣が認められるわけではないのである。付近に良材が不可欠なことは言うまでもない。このような観点で言えば、石垣の有無は、石材の問題であって容易に比較検討は出来かねる。

しかし、石垣の構築目的とそれに関係しての構築技術などは両城の比較に際して問題としてよからう。むしろそのことによって類似性が強調できるかもしれない。

小谷城が随所に石垣を用いて城壁としていることはすでに指摘したが(註4)、鎌刃城にもまた石垣が認められるのでここで両者の関連を見ておこう。

鎌刃城の位置する霊仙山麓は、石灰岩の露頭地帯であって、随所に岩が認められる。しかし、石灰岩は水に溶けやすく奇岩が多く、石垣として積み上げるに際しては、面取りなどのより入念な調整が不可欠である。ただ石質から言えば加工は比較的容易な方であろう。その意味でもけて良材とは言えない。しかし、鎌刃城では中心主郭の外周の急峻な箇所を城壁として石垣で構築し、かつ郭内の土塁内側にも化粧としての石積みが観察された。城門からみて、正面に相当する建物背後に石積がかいま伺えるのは実は小谷城での大広間と同じなのである。黒金門を入ると主殿を隔てて背後に化粧石垣がかいま見やることができるのである。

しかし、両城をもっとも特徴付けるのは小谷城での東側での急峻な山腹に設けられた石垣であり、おなじく鎌刃城での南山腹の石垣である。いずれも城の削平地・郭を広域に確保するために構築されたものではなく、石垣の天場と郭の位置関係からいって、それは山腹の自然崩壊を未然に防ぐための砂防用石垣の側面が強いことが伺われる。小谷城の場合も石垣の天場と郭との間が広く、その間に自然地形が認められることと、石垣によって下場にそれ相応の郭・平坦部が形成されているかといえ、その規模は極めて狭く、石垣積みの作業場程度か帯郭にも至らない空間しか確保できておらない。この点からも本来この石垣が郭の面積をより大きく確保するためのものではなかったであろうことが推察される。つまり両城の石垣は、化粧としてのそれに共通して用いられ、また砂防用としての構築に類似するという、本来の石積みの用途から掛け離れているところに類似点があることに、これまた、両城ならでの強い関連性が思慮されるのである。

以上のように10項目にわたって、小谷城と鎌刃城との類似点を指摘してきたが、両城が極めて緊密な関係にあったことが、その共通項からのみではなく、ほぼ同期と目される他城との相違のなかからも想定しうるのである。つまり、両城は同一の系統下もしくは同一の系譜上にあって築城されたと認め得るのである。もし、このような推定が許されるとすれば、問題は両城のうち、いずれかが他方に先行するののかといったことに帰せられよう。つぎに結びにおいて、特にその前後関係について考えてみたい。

註1. 『滋賀県中世城郭分布調査報告 7』(滋賀県教育委員会, 平成2年3月)

註2. 地元西番場の区長のご厚意で実見できた。

註3. 丸山竜平, 深貝佳世, 齋藤めぐみ「小谷城址の研究(2)」(『名古屋女子大学紀要 第42号』平成8年3月)

註4. 註3に同じ。

むすびにかえて

酷似する両城の問題は、ひいては系譜上の問題に置き換えることができる。はたして小谷城の縄張り構造は15世紀中葉のオリジナルなものとして誕生したのか、それとも鎌刃城から学んだものなのかについての是非である。この問題の解決のためには、類似点の中から時期的に先行しうるものが容易に見出させるか否かである。小谷城では築城後の経過の中で、出丸に著しく見受けられるように、改・増築を続けている。鎌刃城での増築が極一部に止まったのとは対照的であった。この点の考慮も比較の中で無視できない。前後の関係を決めるに際してハードルが存在するのである。

例えば城門に関してであるが、小谷城においてはこの城門が土塁と有機的に関連して構築されている。この一点に関していえば、鎌刃城のそれが形式的に先行するに相違ない。ただし、小谷城の土塁が後世の増補・改築となれば、創建期の新古の問題は別なのである。

同じことは土塁全般についても指摘しうる。鎌刃城のそれは、切り取り、もしくは削り残して築造することで終始している。確実に小谷城のそれより古相なのである。しかし、小谷城のそれに改築が漸次なされたとすればやはり問題は別である。とはいえ、古式の土塁に新たな土塁を重ねるようにしての改築が比較的希であることも事実である。ゆえに小谷城において古相を帯びた土塁が、はたして鎌刃城の土塁と比較してどうかということは、一度は検討にあたいするであろう。同じ切り取りもしくは削り残しの土塁のうちで、両城に相違があるのかわいのかである。このような観点で見たとき、小谷城での六呂坊および金吾丸でのそれが明らかに土塁の天場が自然地形を残さず一定の整形を経たものであることが見て取れるが、鎌刃城でのそれは当初の山形をそのまま残すのではないかと思われるほど高低差が観察された。このような点から言えば、鎌刃城が小谷城に先行して築造されていたことを強く推測させる。

同じく地下式遺構においても、鎌刃城のものは規模も大きく内面外面ともに切り岸が整然としており、明らかに先行すると見た。また大手の城門についても門内部の石段が三方に認められ、門を潜って直ぐに槽の下へ潜ることが出来る、あるいは壁板の無い槽であった可能性がある。この点も小谷城のそれに先行する形態であったとみたい。

以上のように両城の前後関係は総じて鎌刃城が先行する傾向が見て取れた。しかし、石垣などの細部の検討は今後の課題としておきたい。

それにつけても、小谷城は鎌刃城とは縄張りにおいても、構築においても、さらに立地においても、さらには地政学的にも南北が転倒しただけで、そっくりすべてを参酌して築城したことが判明する。

では一体この小谷城の築城に際して、モデルとなった鎌刃城は誰の持ち城であったのだろうか、といったことも興味が沸く。それら残した諸問題は今後さらに検討を加えていきたい。

最後になったが、鎌刃城の調査に際しては、西番場の区長をはじめ、北川麗三氏、「番場の歴史を知り明日を考える会」会長泉 峰一氏、同会員泉 良之氏、東番場田中 薫氏には大変お世話になった。また、中京大学生青木俊輔氏、名古屋女子大学学生岡田 緑、高森真紀、天野利恵、新井裕子、伊藤宏恵、井浪 舞、魚住麻衣、西野靖子、羽賀夕希子の諸氏が合宿に参加した。記して感謝の意にかえたい。